

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 2633 号

Association between class of foundational medication for heart failure and prognosis in heart failure with reduced/mildly reduced ejection fraction

HFrEF/HFmrEF 患者における心不全入院中の基礎治療薬の増減と予後との関連

伊藤 みゆき (いとう みゆき)

博士 (医学)

論文内容の要旨

心不全患者は年々増加しており世界的な社会問題となりつつあり、いくつかの薬剤が心不全患者の予後を改善することが示されているが、心不全入院中の心不全基礎治療薬の最適化と予後との関係を示すデータは少ない。本研究では、心不全入院中の心不全基礎治療薬の増減様式と退院後の予後との関連について、リアルワールドデータを用いて検討した。日本における心不全入院患者についての大規模多施設前向きコホートレジストリー研究である WET-HF、NARA-HF、REALITY-AHF の 3 研究の統合データを用いた。左室駆出率 50%未満の心不全のうち、心不全の既往のある患者を対象とした。3 種類の心不全基礎治療薬 (アンジオテンシン変換酵素阻害薬/アンジオテンシン受容体拮抗薬、ベータ遮断薬、ミネラルコルチコイド受容体拮抗薬)のうち何種類が処方されているか入院時と退院時を比較して、①増えた群、②変わらなかった群、③減った群の 3 群に分類した。主要評価項目は、退院後 1 年以内の心不全再入院または総死亡の複合エンドポイントとした。結果、対象患者は全体で 1113 人であり、482 人に複合エンドポイントが観察された。全体のうち①増えた群は 413 人 (37.1%)、②変わらなかった群は 607 人 (54.5%)、③減った群は 93 人 (8.4%) であった。 Kaplan-Meier 解析及び多変量コックスモデルにおいて、①増えた群では、②変わらなかった群 (ハザード比 0.56, 95%信頼区間: 0.45-0.60; $P < 0.001$) および③減った群 (ハザード比 0.58, 95%信頼区間: 0.40-0.84; $P = 0.004$) と比較して予後良好であった。結論として、左室駆出率 50%未満の心不全において、心不全入院中の心不全基礎的治療薬の種類を増加させることは、1 年後の良好な予後と関連していた。本研究結果は、心不全患者における心不全治療薬の最適化アプローチに影響を与える結果と考えられる。